侍

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
侍

【Ｎコード】
Ｎ８０９９Ａ

【作者名】
時雨

【あらすじ】
これといった特技とかもない、ごくごく普通の高校１年生、槇野美雪。そんな美雪の前に突然現れた違う世界の人間、ジェイクとアーサー。そして見た事もない巨大生物。ジェイクにはいきなり暴言をかけられ、巨大生物には襲われる。そのとき、突然刀が現れ、美雪の中に異変が！！そして「ずっと探しておりました。お侍様。」アーサーからそう告げられる。そして美雪の日常はこの時を境に大きく変わっていく・・・。

プロローグ

よく・・・というか毎日、夢を見る。

そこは上も下も前も後ろもわからない真っ暗の中。
わかることは遠くで赤い光と青い光が重なり合って輝いている事ぐらい。
その光の輝きはとてもきれいで・・・・なぜかとても懐かしくて・・・思わず手を伸ばしてしまう。

でも・・・手を伸ばしても、全くと言っていいほど届かない。

真っ暗で何もない・・・でも・・・寂しくはない・・・逆に不思議と落ち着く・・・
なんでかな・・・現実逃避っていうのかな?

そして、いつも声が聞こえてくる。
何て言っているんだろう・・・聞こえるけど・・・わからない・・・。
日に日にその声は大きくなっているような気がする・・・。

「　　」

あ・・・まただ・・・今日も聞こえる・・・・

「　　」

何て言ってるの？

聞こえるけど・・・・聞こえないよ・・・・

「　・・　・・・・・　・・・・・」

あれ？なにか・・・聞こえたような・・・・

「・・ぁ・・・こた・・・・さ・・らい・・・・」

なに・・・？何て言いたいの？いったいなんなの・・・・・？
なんか・・・頭がズキズキする・・・・

とたんに、赤と青の光が近づいてきた。

今なら・・・・手が届きそう・・・・

そう思って手を伸ばしてみたが、光に触れる・・・と思ったところで光はすっと消えてしまった。

まるで、何かに吸い込まれたかのように。

あ・・・光が・・・消えちゃった・・・
今日こそは届くと思ったのに・・・

でも・・なんでだろう・・・あの光・・・やっぱり懐かしいよ・・・
それに・・・すっごくあたたかい・・・・。
とても大事な物みたいに・・・。

毎日見る夢。
でも、青と赤の光、謎の声、不思議と落ち着く感覚・・・
同じに見えて毎日少しずつ変わっている。

いつから・・・同じ夢を見るようになったんだろう・・・・・・

夢だと思っていた事

「美雪～！！いつまで寝てるの？早くしなさい！！」
お母さんの声で、わたしは夢から現実世界へと戻ってきた。

わたしの名前は槇野美雪。
現在高校1年生で、これといった特技とかはないごくごく普通の高校生のつもりです。
せいぜいテニスをやってて、現在進行形で今もやってることぐらい。

ただ・・・毎日同じ夢を見る。
気が付いたら・・・たぶん覚えてる範囲ではだいたい小学校2年生ぐらいから見るようになって、ここ最近はもう毎日。
授業中居眠りしちゃったときとかまで。

・・・なんでこんなに夢ばっかり見るんだろう・・・。

「コラ美雪～！！」
「は～い！！すぐ行くから！！」
急いで服を着替えて台所へ向かった。

急いで身だしなみを整えて、台所に置いてある弁当を袋に包んで、朝ご飯を食べるためにイスに座った。
「いただきます！！」

「そうだ。美雪、お母さん今日用事があるから、帰るのが遅くなりそうなの。だから・・・」
「わかった。晩ご飯わたしがつくっとくから。」
「ありがとう。」
会話がはずんでいるうちに、朝食を食べ終わった。

「ごちそうさま。じゃあ学校行ってくるね♪」
「はいはい。いってらっしゃい。」

まさか・・・これがここでの最後の朝食になるなんて思ってもみなかった・・・。

美雪は家を出て、学校に向かって歩いていた。
だいたい学校は歩いて２０分ぐらい。
朝練とかもないからのんびり行ける・・・なんて考えていると、後ろから声をかけられた。
「おっはよ～美雪♪」
「あ、おはよ～桜。」
彼女は日里桜。美雪とは中学の時からの親友で、同じクラス同じ部活である。
「ねえねえ、今日暇？よかったら遊びに行かない？」
「少しだけならかまわないよ。」

「じゃあ遊ぼ〜！！」

普段通りの会話をしているうちに学校に着いた。
だいたい予鈴が鳴る5分ぐらい前に。

自分の席に座って、窓の外を眺めた。

（・・・今日の夢・・・あの光はなんだったんだろ・・・）
ふとよぎった今朝の夢。
光の事だけでなく、あの謎の声。
他人事のようには聞こえなかった。
（いったい・・・誰が・・・・・・）
突如、睡魔が襲ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・」
あれ・・・？また聞こえる・・・。

「・・さ・・・い・・ま・・・・」
でも・・・やっぱり何て言ってるのかわからないよ・・・。

「・・・・・だ・・・ばか・むら・・・・」

あれ？馬鹿って聞こえたような・・・？

「何してんだよこの馬鹿侍！！」

！？！？

今の・・・誰！？

「こら起きろ！！授業中だぞ！！槇野！！！！！」

「！！！！・・・あれ？・・・・・！？！？」

気が付くと授業中だった。

「あれじゃないだろ！！なに居眠りしてるんだ！！」
「うわあああああす・・すみません！！！！！」
周りから笑い声が聞こえてくる。
しまった。また寝ちゃったのか・・・
眠くないのに何で寝ちゃうんだろう・・・・。
「全く・・・しっかり受けないと成績下げるぞ！！」
「・・・ごめんなさい・・・・」
さっきの声・・・先生の声だったのかな・・・？でも・・・侍って・・・いったい何なの・・・？

結局、それから午前中の授業は全然集中して取り組めなかった。

「み～ゆき！！お昼食べに行こうよ♪」
「うん。いいよ。」
そう言って桜と一緒に屋上に向かった。

「ねぇ、今日の美雪おかしくない？突然寝ちゃったりさぁ～。」
「ええ！？そ・・それはその・・・なんか急に眠くなっちゃって・・・」
「疲れてたの？」
「そ・・そうだと思う！！」
美雪は苦笑いでそう言った。

別に疲れてなんかいないし、眠くもなかった。それなのに眠ってしまった・・・。
それにあの声・・・
やっぱり気になってしまう。

「あ、忘れ物しちゃった!!ごめん美雪、先行っといて!!」
桜はそう言うと、教室に向かって走り出した。
「あ・・ちょっと桜・・・もう・・・。」
美雪はそう言って、すぐに屋上に向かった。

屋上には誰もいなかった。
吹き抜ける風が心地よい。
「この辺でいいか♪」
美雪は隅の方に座り、静かに桜が来るのを待とうとした。

そのとき

「!?!?」
突然周りの様子がおかしくなる。
景色が突然歪み始めた。
「な・・何これ!?どうなってんの!?!?」

そう思わず口にした瞬間、自分の隣の壁がひび割れし始めた。
そのひびはだんだん大きくなって、小さなトンネルのようになった。

そしてそこから・・・

「・・・くそ・・・逃げ切れるか・・・」
そう言いながら誰か出てきた。

出てきたその人は、銀髪のやや髪の長い男の人。
なんだか冷たいオーラを放っているように見える・・・。

そしてなぜかその声は

夢で聞こえた声と同じだった・・・・・

言い放たれた真実

いったいどうなっているのだろう。
ただでさえ今信じられない現象が起こっているのに、夢で出てきた声がなぜ・・・

銀髪の男が完全に出てくると、周りの空間の歪みがなくなり、元に戻った。
「・・・え？ど・・どうなってんの！？」
美雪はわけがわからずに周りを見渡した。
元に戻った空間は、まるで何もなかったかのようにいつも通りだった。

美雪が呆然としている間に、男が突然動き出す。

「あ、ちょっと待って！！」
美雪は慌ててそう言ったが、男は少しも耳を傾けずにどこかへ行こうとした。
まるで、こちらには全く気が付いていないかのように。

「ちょっと！！待てっていってんじゃん！！」
美雪は少し怒って男の腕を思いっきり引っぱった。
倒れるぐらいの勢いで。

振り向いた男の顔はかなり驚いている。
「てめぇ・・・俺が見えるのか！？」
「・・・は？何言ってんの？」
美雪はわけがわからないと言うように目を点にしたが、相手の方は突然美雪を振り払って腰に掛けていた刀を抜いて、美雪に向けた。
思いもよらなかった行為に美雪はもっと驚いた。

「ちょ・・ちょっと！！・・いったい何のつもり！？」
「てめぇ何者だ！！」
「は・・・はい？」
「さっさと言え！！」
言っている意味がわからない。

「何者って・・・ただの高校生なんですけど・・・」
「そんなに死にたいのか！？」
「えええええ！？！？訳わかんないんですけど！！」
もはやパニック状態だ。まぁそれもそのはず。
突然訳のわからない事を言って、刀突きつけられたのだから。

だが、相手はどんどん怒りを募らせてくる。
「・・・・・・・・」
「あのさ！！何かわたし悪い事したの！？」
美雪は必死にそう言った。
「誰だか知らないけど、わたし悪い事した覚えないよ！？」
「・・・何言ってんだ？てめぇ・・・」

相手は何を言ってるんだお前という顔をしたが、突然思い立ったように声を上げた。

「お前・・・まさか・・・さ・・・・・」
何か言おうとした瞬間に、また周りの景色が歪み始めた。

「クソ！！追いつかれたか！！」
「・・・！？！？」
いったい何が・・・と言おうとした瞬間に、巨大生物が数匹、歪んだ空間から出現した。

「えええええ！？な・・何よこいつら！！」
さらにパニック状態に陥る美雪。
「んなもん見たらわかるだろ！！化け物だ化け物！！」
「わかるわけないじゃん！！」
美雪のツッコミを半分スルーして、男は続けた。
「あ～もういい！！逃げるぞ！！」
「ぎゃあああ！！何すんのよ！！」
「うるせぇ！！置いてくぞ！！」
見た事もない化け物が現れたかと思うと、突然襲いかかってきた。
男は咄嗟に呆然と立ちつくしている美雪を抱えると、屋上のフェンスをよじ登った。

「え？ちょっと待って！？何する気・・・？」
美雪の質問に答えずに、男は美雪を抱えたまま真っ直ぐ地面に向かって飛び降りた。

「！！？～～～～！！！！！」
怖さに何も言えない美雪。
だが、急に落ちているという感覚がなくなった。
「・・・飛んでる・・・？」
男の方を見ると、背中から翼が生えている。
真っ黒で、カラスのような翼。
しかし、その翼はかなり傷ついていた。
「え・・？ちょっといったいどうなってんの・・・？」
「少し黙ってろ！！」
美雪にそう怒鳴りつけると、男は猛スピードで降下し始めた。
「～～～～～～！！！！？？！！！！」
一瞬、意識が飛んでいきそうになった。
そのあまりの速さに、巨大生物は二人を見失ってしまったようだ。

男が着地したところは学校から遠く離れた木の茂った寺の裏側。
たった一瞬だったのに、だいたい１ｋｍぐらい離れたところに来てしまった。
「ねぇ・・・いったいあんたって・・・」

「・・・っ！！」
質問しようとしたとたん、男は急に苦しみだした。
美雪は驚いて駆け寄り男を見たが、体中痣だらけで、翼は大きな傷があった。

「手当てしないと・・・」
「触るんじゃねぇ！！」
男の身体に触れようとした瞬間、思いっきり手を弾かれた。

「なによ！！手当てしてあげようとしてんじゃない！！」
「大きなお世話だ！！・・・って痛てぇ！！！！なにしやがる！！」
傷口を軽く弾くと、飛び上がるように男は声を上げた。
「ちょっと待ってて。化膿したら大変でしょ？」
そう言って美雪は相手の有無を問わずに簡単な手当を施した。
少し暴れられてやりにくかったけど・・・。

「これで良し！！・・・・で、聞きたい事があるんだけど。」
手当を施すと、美雪はそう言って男の方をじっと見た。
「あんた・・・いったい何者なの？」
美雪の質問を聞いた男はふっと笑ってこう言った。

「それはそのままてめぇに返すぜ。てめぇこそ何者だ？」
質問を質問で返されてしまった。

「ちょっと！！ちゃんと答えて・・・」

「俺の姿はこの世界の人間には見えないんだよ。」

美雪の顔色が変わった。

それじゃあ・・・わたしは・・・・

「お前は、波長的にも、俺たちの世界の人間なんだよ。」

突然の言葉に、美雪は呆然と立ちすくむしかできなかった・・・。

「う・・・そ・・・・・・・・・」

何かが砕ける・・・音がした・・・・・・

光と覚醒

「な・・・何を言ってるの？・・・なにかの・・・間違いでしょ・・・・・。」
突然告げられた言葉。それは自分はこの世界の人間じゃないと言う事。
あまりに唐突で信じられなかった。・・・いや、信じたくなかった。
もしそれが本当なら・・・今までの１６年間はいったい何だったのだろう。
それに・・・自分の母親は・・・・・・・・

いや、この男の言ってる事が間違っているのだろう。
美雪はそう思おうと、必死に男に反抗した。

「何の証拠もないのに、デタラメを言わないでよ！！わたしにはちゃんと両親がいる！！お父さんは死んじゃったけど、お母さんがちゃんといるんだから！！」
男は美雪の様子を見て、ふっと笑ってこう続けた。

「実はなぁ、今からだいたい１６年前にとある事件が起こったんだよ。」
「じ・・事件・・・？」
「敵国と戦争で巨大な力と力がぶつかり合って、空間に歪みが現れた。後にその歪んだ空間は大きさを増し、ブラックホールのようになった。そして多くの者が、その空間に吸い込まれていったんだ。」
淡々と話をしていた男が美雪の方を見てこう言った。

「そして、今だに行方不明の奴が４人ほどいる。当時１０歳と８歳、そして・・・うまれて２，３ヶ月の２人の子どもだ。」

「まさか・・・」
美雪が驚いたように目を見開いた。
「おそらく、お前は一番最後に言った子どものどちらかなんじゃねぇか？」
「う・・・そ・・・じゃあ・・お母さんは？わたし、物心ついたときからずっとお母さんと一緒にいたのに・・・・」
確かに親の髪は少し赤みのかかった色だが自分の髪は真っ黒なところなど、自分は親とあまり似ていない。だが、母が「美雪は祖母に似ている」と言われたので気になどしなかった。

「それにお前、俺が見えるだろ？それがこっちの人間じゃない何よりの証拠だ。」
「そんな・・・」
目の前の男はちゃんと見える。見たくないと思っても、はっきりと。

「じゃあ・・・わたしは・・・」
涙が溢れてきた。
唐突に突きつけられた、自分には残酷な真実によって。
「わたしは・・いったい誰なの・・・？」

自分に問いかけるように呟いた一言。
それに答えたのは真実を話した男だった。

「断定はできないが・・・結構な身分の人間だと思うぜ？」
「・・？それって・・・・・」
どういう事？と聞こうとしたそのとき、
先ほど振り切った巨大生物が現れた。

二人とも話に真剣だったので、気づくのがワンテンポ遅れた。
今からかわそうとしても間に合わない。やられる！！
そう思って美雪は堅く目を閉じた。

しばらくしても何の衝撃もない。
隣にいる男が何かしたのかと思ってそっと目を開けると、知らない人が巨大生物を一刀両断していた。
そして笑顔でこちらに声をかける。
「ずいぶんと苦戦していたようですね、ジェイク。」
「けっ、うるせぇよ。いちいち言うんじゃねぇ。」
「どうしたんです？なにやらご機嫌斜めのようですが。」
「うるせぇっていってんだろアーサー！！少し黙ってろ！！」
美雪はぽかんとして男達を見上げた。
また知らない男が現れた。背が高くて気品もよく、一言でいうなら「紳士」だ。
ふと、アーサーと呼ばれた男と目が合う。
「あれ？ジェイクこの子誰です・・・・」
美雪を見た瞬間、アーサーの笑顔が急にこわばった。

「ジェイク・・まさか・・・」
「あぁ。認めたくないが・・十中八九行方不明の2人のうちのどちらかだろう。」
「・・・・・・」

「えと・・・どうも・・・？」
沈黙が続きそうだったのでとりあえず声をかけてみた。
すると突然アーサーが目の前に立ち、じっとこちらを見つめた。
「あの～・・・どうかしたんですか・・・？」
どうしたらよいかわからない美雪はただ呆然と立ちつくしているだけだった。
「どうやら・・力は解放されてないようですね。」
「ち・・力！？」
「あれ？あ、失礼しました。自己紹介すらしてませんでしたね。わたしはアーサーと申します。そこにいるのはジェイクです。」
「はぁ・・・」
「ジェイクからはまだ聞いていないんですか？」
「えっと・・・その・・・」
美雪がいい詰まってしまったので、代わりにジェイクが
「だいたいは伝えた。力に関してはまだだけどな。」
と、吐き捨てるようにそう言った。

「じゃあ・・簡単に説明・・・」
しようとした瞬間、
「誰だ！！そこにいるのは！！」
と言う大きな声が聞こえた。
「やば！！見つかっちゃう！」
おそらくお寺の住職だろう。美雪は慌てて隠れたが、運悪くあっさり見つけられてしまった。

「貴様！！そこで何をしている！！ここはこの寺の土地だぞ！！」
「えええ？あ・・す、すみません・・。」
一方的に美雪にケチをつけてくる。
美雪はどうしようかと困っているとき、ジェイクはのんびりあくびをして、アーサーは周りを見渡していた。

「ちょっと！！ふたりとも謝ってよ！！」
「何言ってんだてめぇ。普通の人間には俺らは見えねぇんだよ。」
「あ！！そうだった・・・」
「おい！！なにを一人で話ているんだ！！こちらの話を聞け！！」
「うわぁ！！ごめんなさい・・・！！」
・・・そういえば・・・この2人って普通の人間には見えないんだっけ・・・。
少しうらやましいと思ったそのとき、

「危ない！！」
いきなりアーサーがそう叫んだ。
いつの間にか巨大生物に囲まれている。
「うわぁ！！」
「っちィ！」
美雪はジェイクに抱えられて敵の攻撃をかわしたが、住職は巨大生物が見えていないのか、突然木がどさっと倒れたことに驚き、身動きがとれない状態だった。
敵は住職に向かって近づいてくる。
住職は全く気づいていない。

「だめ～！！住職さん！逃げて～！！」
「・・・！？！？なんだ？」
言っている意味がわからないようで、立ちつくしたままだった。
このままだったら・・確実に殺される。

だめ！！このままじゃ住職さんが！！

そう思った瞬間、美雪はジェイクの腕をふりほどいた。
「お・・おい！！」
ジェイクの声にも耳を傾けず、真っ直ぐに住職に向かって走った。
「こら！！待て！！」
「な・・お待ちください！！」

敵が鋭い爪を向け、真っ直ぐ住職に向かって振り落とした。
その瞬間、美雪は住職を突き飛ばし、盾になるように前に躍り出た。

なぜかそのとき、恐怖はなかった。
その代わり、身体からあたたかい光が飛び出してくるような気がした。

そう、まるで・・今朝の夢で出てきた光のような・・・。

ジェイクとアーサーがその後すぐに聞いた音は血が噴き出す音ではなく、はたまた身を切る音でもなく。
刃物と刃物が接触した音だった。

「・・・あれは！！」

美雪の手には、1本の赤い剣が握られていた。
何も持ってなかったはずなのに。
美雪は無意識のうちに剣で敵の爪を防いでいた。

・・住職さんを・・守らなきゃ・・・

「まさか・・・彼女が・・・」

アーサーの呟きは、風に流されるように森の中に凛と響いた・・・。

それは唐突に告げられて

どこからか1本の剣が出てきた。
・・・いや、刀と言った方がいいかもしれない。
見たことも触ったこともないのにまるで手に吸い付くかのように軽く、自分の思った通りに動いた。
頭があんまり働かない・・・。

住職さんを・・守らないと・・・・

わたしが・・こいつらをやらないと・・・・

そう思った途端、身体が火がついたように熱くなった。

敵の爪を刀で受け止めた美雪は、なぎ払うように敵の爪を押し返した。

押し返しただけだった・・・。

それなのに、敵から大量の血が飛び出し、絶命していった。
斬りつけていないのに、刀を振っただけで・・・。

「な・・・なんなんだお前！！」
ふらっと美雪は住職の方を振り返った。
禍々しい殺気を住職に向けながら・・・。
「・・・・うわぁぁぁぁ！！」
住職は美雪を見たと思った瞬間、一目散に走って逃げていった。

「あ・・・あれ？わたし・・・」
突然我に返ったかのように、美雪から発していた禍々しい殺気はすっと消えていった。
「あれ？住職さん？どこ行っちゃったの？」
そしてまたパニックに陥ってしまった。

・・・何も覚えていない。
確か・・・住職さんが変な生き物にやられそうになって・・・それから・・・
ふと自分の手元に握られている刀を見た。
その刀には・・・いくらか血がついている。
弾かれたように周りを見渡すと、そこには無惨な死体が転がっていた。

「う・・・うそ・・・これ・・わたし・・・・・・が・・・・！？」
信じられない。いや、信じたくない。自分が・・・殺したなんて。
「落ち着いて！！落ち着いて下さい！！」
「・・ア・・アーサー・・・さん・・・」
肩を揺さぶられて、恐れるようにアーサーを見上げた。

「少し・・・場所を移動しましょう・・・。ここでは少し酷な話です・・・。」

さっきの場所から２００メートルぐらい離れたところに3人は移動した。
「・・すみません・・・」
「っけ。たかが動物１匹殺したぐらいで。」
ジェイクの憎まれ口で美雪は硬直した。
「アーサー！！」
「事実だろ？こいつの身分上、こんなの平気でこなせねぇと。」
アーサーはその一言で、何も言えなくなってしまった。

「ちょっと待ってよ！！わたし・・こんなこと平気でできないよ！！なんでこんなことしないといけないの！？」
「落ち着いて下さい！！」
「なんなのよ！！わたしがいったい何だって言うのよ！！」
美雪の叫びが響き渡った。

「まだ・・何も言っていませんでしたね。」
「え・・・？」
アーサーはそう言うと、美雪の前で膝を折り礼をした。
「あの・・何を」
「ずっと探しておりました。お侍様。」

「さ・・・侍・・・！？」
「あなたは私たちの国の長なのです。」
突然の告げに、美雪は目を点にした。
「うそ・・・・」
「不本意だがうそじゃねぇよ。」
「ジェイク！！」
「うるせぇなぁ・・・。おい、お前。」
ジェイクは美雪の方を見た。
「な・・何？」
「てめぇのその剣。・・・なんか剣というかぼろくて細長い包丁みたいだがな・・・。まぁ何でもいいが、それがてめぇの中から出てきた。それが侍の証なんだよ。」
「これが・・・？」
美雪は握っている刀を見た。
ぶっちゃけ、ただの日本刀にしか見えない。

「ずっと行方不明で・・・探しに探して・・・。」
知らなかった。いや、知るよしもなかった。
自分がずっと探されていたなんて。

「そうだった・・んだ・・・。あの・・・アーサーさん？」
「何でしょうか。」
聞きたい事が山ほどあるのだが、うまくまとまらない。
少し間をあけて、ようやく口にした言葉がこれだった。

「その・・・堅苦しい敬語やめてくれないかな？なんか・・・やりづらいんですけど・・・。」

アーサーは驚いたように美雪を見た。
美雪はそんなアーサーを見て続ける。

「今まで敬語なんて使われた事なかったし・・・なんか実感わかないから・・・」
「ですが・・・」
「いいんじゃねぇの～？お侍様がそう言ってる事だしよ～。」
ジェイクからのかなり棘のある台詞だった。
だが、美雪には少しありがたかった。
「・・・わかりましたよ。」
アーサーがそう言ってくれたので少し安心した。
ちょっとジェイクの言い方にはムカッときたが。

「まぁ、話はまとまった事だし、帰るか。」
「そうですね。早く報告しないと。」

「え・・・・？」
二人の会話に、美雪は凍り付いた。
二人の言う「帰る」・・・それは美雪にとって・・・・
この世界を・・・１６年間ずっといた世界を・・離れること。
そして友達と・・・自分を育ててくれた、たとえ血はつながっていなくても、・・・自分にとってはたった一人の大切な母との・・・

小さな決意

「いつ頃帰れるんだ？」
「そうですね・・・だいたい・・・・・・・・・」
彼らの会話が聞こえない。
いや、聞きたくない。
「・・・・いや・・・・」
「どうしたんです？」
アーサーの声も耳に入らない。
ただ、おびえたように身を震わせた。
「わたしは・・・わたしはここに居たい・・・・」
「てめぇ何言って・・・・」
「いや！！わたしは・・・たとえこっちの人間じゃないんだとしても・・・ここに居たいよ・・・・。」
「・・・・・」
アーサーは言い詰まってしまった。
彼女にとってはここが生まれて育った世界。そう簡単には離れたくないのは十分わかっている。
だが・・・
「しかし・・・」

「けっ。ならてめぇの好きにしろよ。」
突然のジェイクの一言に美雪は驚いて顔を上げた。
しかし、次に返ってきた言葉に美雪は目を見開いた。
「ただし、てめぇの周りにいた奴がどうなっても知らねぇからな。」
「そんな・・・何で！？」
「てめぇが力を覚醒させたからだ。これからお前は狙われる。敵も頭いいからな、囮にお前の友達や母親を・・・」
「・・・うそ・・・」

自分がこっちに居たくても、こっちにいると友達や母が・・・・
「すみません。でも事実なんです。今まで狙われなかったのが奇跡としか・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・」
みんなを危険にさらすわけにはいかない。ただでさえ、普通の人は敵の姿が見えないのに・・・・。

「・・・・アーサー・・・・」
「・・はい？」
美雪はぐっと涙をこらえて、顔を上げてこう言った。
「いつ・・・向こうの世界に行くの・・・？」

「けっ。ぎゃーぎゃー言ってた割に、結局来るのかよ。」
「な、何よ！！行っちゃだめってわけ！？」
「うるせぇ侍なんかいらねぇよ。」
「なんですってぇ！？」
「フン。」
美雪はすっかりジェイクのペースに乗せられている。
しかし、おかげで一気に周りを取り巻いていたピリピリとした空気がすっと消えた。
「ジェイク！！すみません・・えーっと・・・そう言えばまだ名前

聞いてませんでしたね。」
「あ・・槇野美雪です。」
そう言えばまだ言ってなかった。
なんだか改めて自己紹介するのも変な感じがする。
「じゃあ美雪・・・でいいですか？」
「あ、はい。なんでもいいですよ。ジェイクじゃないから。」
美雪は笑顔でそう言った。
「そんなに殺して欲しいのか！？」
もちろんジェイクの言葉はスルーした。
「こらジェイク。・・・じゃあそろそろさっきの質問に答えますね。帰るのはだいたいこっちで6時ぐらいです。」
「決まってるの？帰る時間って。」
「はい。こちらには決まった日、決まった時間内しか来る事はできません。」
「いったいどうやって・・・・」
「あちらには空間を操る力を持つ者がいます。その者の協力で新月・・月が出ない日のみこちらに来る事ができます。」
「え？じゃあわたしはどうやって・・・」
アーサーは少し黙ってからこう続けた。

「まず新月の日の話からしましょう。なぜかわかりませんが、新月の日はこちらとあちらの世界を行き来することができるのです。しかし、新月の日以外にこの世界に来るとあちらの世界だけじゃなく、こちら世界にも影響が出てしまうんです。もちろんこれも理由はまだわからないままです。」
「へぇ・・・」
「16年前に、大きな戦争をしてたんです。そのとき突然空間が歪んで・・・。新月の日ではありませんでした。一般市民や軍の者も多くがそのとき現れたブラックホールの中に飲み込まれていきました。あなたもそれに巻き込まれたのです。」

「そう言う事だったんだ・・・。」
「これは確かな情報ではありませんが、この世界の人間が何人かそのときの影響で私たちの世界に来てしまったというのも・・」

「そう・・なんだ・・・・。」
全然知らなかった。いや、知りようがなかった。
母はどこで自分を見つけたのだろう。
そしてなぜ、自分を育ててくれたのだろう・・・・。

「だいたいわかってもらえましたか？」
アーサーがそう言って美雪の方を見た。
「うん、ありがとう。・・・・ねぇ・・・・」
「なんですか？」

「まだ時間あるでしょ？最後に・・・家に帰って晩ご飯だけ・・・作っていいかな？」
もうあえないだろうから。
せめて最後に・・・約束した料理だけでも・・・・。

旅立ち

美雪は家に帰って、せっせと料理を作っていた。
今はまだ3時を過ぎたところ。学校のことはすっかり忘れている。
（いいのか）
・・最後だから、精一杯おいしい料理を作ろう。
美雪はそれだけを考えて、必死に手を動かしていた。

その様子を2人の男が見つめていた。
「おい、いいのか？」
「何がです？」
「あいつ・・・あんな事させといて。また行きたくねぇとかいいだすんじゃねぇの？」
「6時までは向こうに帰りたくても帰れないんですから、それに最後かもしれないじゃないですか。彼女も相当つらいはずですよ。」
「甘いんだな。」
「あなただってそのくらいの感情はあるでしょう。」
「けっ。」
そう言ってジェイクはそっぽを向いた。
「素直じゃないですね。」
アーサーの言葉を無視して、ジェイクはごろんと寝ころんだ。

「ちょっとジェイク！！なに寝転がってるの！！」
突然飛んできた美雪からの声。
「別にいいじゃねぇか。減るもんじゃあるまいし。」
ジェイクはだるそうにそう言おうとした・・・が、その前にお玉が顔に命中した。

「いってぇ！！何しやがんだてめぇ！！」
「寝転がらないでって言ってるでしょ！！」
「あーはいはいけんかしないで下さいね。」
険悪な空気になったのをアーサーが止めに入った。
２人はにらみ合いながら渋々とけんかを終了させた。

ふとアーサーから声がかかった。
「料理の方はいいんですか？」
「今は・・することないから。」
少し寂しそうに美雪は答えた。
やっぱり・・・いや、自分がここにいたら・・・。
じっとしていると同じ事を何度も考えてしまうので、美雪は立ち上がって適当にうろうろし始めた。

ぼーっと歩いていたので、足下にある何かに気が付かなかった。

げし。

「あれ？」
なにかを蹴ってしまった。よくみるとそれはアルバムだった。
「うわぁ～懐かし～！」
思わず手にとって見始めた。
「うわ～小せぇときから不細工だなてめぇ。」
「うるさい黙れ。」
「そうですよ。とてもかわいいじゃないですか。」
２人の男も見るのに加わって、まじまじと小さいときの美雪や母の写真を見つめた。
早くに死んでしまった父の写真もあった。

「そういえば・・・アルバムなんて見たの初めてかも・・・。」
なぜか母はアルバムを見せてくれなかった。母は自分の若いときの写真を見られたくないと言っていたが。
「やっぱり・・・わたしが本当の娘じゃないから・・・だったのかな・・・」
「だからてめぇがブスだったからだろ？」
鉄拳がジェイクの腹に命中した。
「いってぇ！！！！」
もちろんシカト。
だが、ジェイクに鉄拳をお見舞いしたときに、アルバムを取り落としてしまった。
「あぁ！！もう！！」
そう言って拾い直したとき、ふと一枚の写真が落ちてきた。
小学生ぐらいでランドセルを背負った男の子だった。
「誰コレ・・・」
そういって裏を見たとき、美雪の顔が青ざめた。

息子　広樹　６歳　小学校入学

さらに、日付が１６年前だった。

「うそ・・・まさか・・・」
「おい、アーサー！！」
「巻き込まれた可能性がありますね・・・１６年前のあの事件に・・・。」
美雪は慌ててアルバムを開いてみた。
しかしこのアルバムはその男の子の写真はこれ一枚だけだった。
「ねぇ、アルバム探すの手伝って！！」
「わかりました。」
「けっ。」

そう言って探し始めて1時間が経過した。

「おい・・どこにもねぇじゃねぇか。」
「捨てたのかな・・・」
あちこち探し回ったのだが一向に見つからない。
それにもう空は赤く染まり始めていた。

「どうしますか？まだ探しますか？」
「・・・・・・」
なにか心当たりはないか、美雪は必死に思考を巡らせていた。

「無駄なんじゃねぇの？こんだけ探してみつからねぇんだしよ。」
ジェイクは寝転がりながらそういった。

彼の言葉はもっともだ。だがあきらめたくなかった。
「少し黙ってて。」
「っけ。・・・ん？」
「・・なによ。」
ジェイクは何か見つけたようだった。
指さしたところはテーブル。
一見何もなさそうだ。

「どうしたの？」
「下から見てみろ。なんか切れ目がある。」

ジェイクの言う通り、そこには四角い切れ目があった。
触ってみると、古かったのか簡単に取り外せた。

そこから落ちてきたのは母子手帳。
それは槇野広樹のものだった。

「やっぱり・・間違いないよ。・・・お母さんの本当の子は・・・」
そのとき、突然ドアが開いた。

「ただいま～。あら美雪、帰ってた・・・・あら？どちら様・・？」
「え？見える・・・の？」
母はジェイクやアーサーを見て驚いたが、美雪の手にある物を見て硬直した。

「美雪・・・何でそれを・・・？」
「・・・お母さん・・・実は・・・わたしは・・・」

そのとき、窓ガラスが突然割れた。
今度は小さな生物が数匹、母に向かって飛び込んできた。

「いかん！！」
「くそ！」
スピードが速く、追いつく事ができない。
敵は全身が刃物のように鋭い棘を持っていた。
「きゃあああ！！」
母は腰を抜かしてしまった。
「お母さん！！！！」

また、光が見えた。

自分を纏うように光が集まってくる。

そんな感覚の中、美雪は静かに腕を振り上げた。

「・・・・・！？」
何の衝撃もこないのでそっと目を開けてみると、そこには刀を持った美雪が立っていた。
「美雪・・・？」
母はそっと声をかけてみた。
するとまるで別人のような冷たく、赤い目をした美雪が睨んできた。
思わず小さく悲鳴を上げて下がってしまった。
「やっぱり・・・怖い・・・よね・・・。」

返ってきた返事は優しく、いつも聞いている声。
でも、どこか寂しいような音色だった。

「美雪・・・」
「今までありがとう。もう・・行かないと・・・」
「行くって・・・どこへ？」

「違う世界。わたしはこっちにはいられないの。」
美雪はそう言ってもう一度母・・・自分を育ててくれた女性の方を向いて、笑顔でこういった。

「広樹君はわたしが見つけてくるから。」

美雪がそう言った瞬間、突然空間が歪んで小さなトンネルができた。
「いいんですか？」
「・・・・うん。」
「じゃ、行くぜ。」
美雪はアーサーとジェイクとともに、トンネルに入っていった。

「美雪！！」
美雪の足が一瞬止まる。
後ろを振り向こうとしてためらい、また進もうとしたとき、

「待ってるから・・美雪が帰ってくるのをいつまでも待ってるから！！美雪！！お前はわたしの・・・」
思わず美雪は振り向いた。もうトンネルの入り口は閉まりかけている。

ほんの少しだけ母の顔が見えた・・・。

「大丈夫ですか？」
「・・・うん。・・・」
美雪は涙をぬぐってまた進行方向を見た。

「行こう。」

新天地はすぐ目の前・・・

もう一つの始まり

真っ暗の中、アーサーに手を引かれながらとぼとぼと歩いていた。
前は何も見えない。もちろん後ろを振り返っても。

・・いや、振り返ってはいけない。
もうそれだけで涙が出そうだから。
美雪はそう思って歩くスピードを速めた。

すると、急に何かに引っぱられるように足が勝手に動いた。
空間がかなり歪み始めたので美雪は思わず目を閉じた。

だが、なんの衝撃もない。

「おい。いつまで目ェつぶってんだ。」
「え？」
おそるおそる目を開けてみると、そこには広大な草原が広がっていた。

「うわぁぁ～・・・」
もといた世界とは全く違う景色に、思わず見入ってしまった。
「ここが・・・もう一つの世界・・・」

「あの～、景色に心を奪われているところ悪いんですが・・・」
「うひゃあ！！」
アーサーの言葉に美雪は思わず悲鳴らしきもの？をあげてしまった。
（しまった・・・油断してた・・・）
軽く自己反省。

「おいさっさとしろよ。こっちももうすぐ日が暮れる。」
「わかってますよ。そういうわけで姫。」
「え？姫！？」
アーサーは美雪の驚きに対して軽く笑顔をつくると、
「今から城にご案内しますね。」
そう言った。

言った途端アーサーの身体が光り、思わず目をきつく閉じた。
「ちょ・・・ちょっと！！」
「しっかり捕まっていて下さい！」
そう言って3人は草原から姿を消した。

次にやってきたのは大きな城。
「はい。到着です♪」
「え？えええ？？アーサー！！今何を・・・？」
もうすっかりうろたえている美雪。

そんな美雪を見てジェイクは
「アホかお前。アーサーが力使ってここまでワープしたんだろうが。
そんな事もわからないのか？」
そう馬鹿にするように言った。
「うるさい！！しょうがないじゃない！！初めて見たんだから！！」
事実だった。向こうの世界にはこんな事できる人なんていない。
「こんなもん常識だろうが！！お前それでも侍か？」
「何ですって！？」

「はいはい喧嘩はそれくらいにして。」
アーサーは2人を宥めると、周りから人がやってきた。

「アーサー殿、ジェイク殿、お疲れ様です。」
「お帰りなさいませ。」
次々と人が集まってくる。
兵士や城の誰かの世話役など・・・

「アーサー殿。そこの方は？」
一人の兵士が美雪を指さしながらそう訪ねた。
「え・・・えっと・・・わたしは・・・」
美雪はとっさにどういえばいいのかわからなかった。

「この方は美雪様。１６年間探し続けたお侍様です。」
「な・・・なんと！！ご・・ご無礼をお許し下さい！！」
「お侍様！？」
「・・・！？・・・・・！！！！」
アーサーがそう言った途端、周りの人々が急に頭を下げた。
「ちょっとアーサー・・・！」

「姫。どうぞこちらに。」
「・・・ジェイク！！」
「・・・・・・・。」
2人とも突然態度が変わった。
そんな2人に連れられるまま、美雪は城の中へと入っていった。

城の中は、まるでおとぎ話に出てくるようなもので、とても広い。
美雪はそんな城の中を興味津々に見ながらアーサーについて行った。
「姫様。今日はもうお疲れでしょう。こちらで疲れを癒して下さい。」
アーサーが大きな部屋で立ち止まると、そう告げた。

「ねぇ、普通に美雪でいいんだよ？姫なんてやめてよ。」
ごくごく普通の女子高生として生きてきたので、姫という呼ばれ方はどうも嫌だった。
だが、
「すみません。それはできませんね。あなたは私どもが軽く呼べる相手ではないのです。特にこの城内では。」
「え・・・？」
ふとジェイクの方を見る。
「・・・・けっ・・・・。」
「ジェイク！！」
アーサーの怒鳴り声が響いた。

「・・・・・・・・てめぇ・・・いや、姫は・・・俺たちを統括しなくてはならねぇんだ。それぐらいで愚痴言うんじゃねぇ・・・いや・・いうもんじゃない・・・・・・」
ジェイクのたどたどしい敬語に、思わず美雪は吹いてしまった。

「・・・・・（ムカッ）・・・・。」
「ごめんごめん・・・あまりにも面白かったから・・・」
「だ～も～！！なんでてめぇごときに敬語なんざ使わにゃならねぇんだよ！！」
「おいジェイ・・・」
「いいよ。敬語使わなくてさ。」
アーサーの言葉を否定する発言をした。
「姫・・・」

「そう言えば・・・」
ふと美雪の頭に先ほどのジェイクの言葉が過ぎった。

～てめぇは俺たちを統括しなくてはならない～

そのときの美雪には、どういう事かわからなかった。

「・・・とにかく、今日は体を休めて下さい。」
「あ・・うん。ありがとう・・・。」
アーサーはそう笑顔で言うと、美雪を部屋の中に入れた。

「この部屋にある物は自由に使ってもらって結構です。何かあったらここを押して下さい。」
「わかった。」
「それでは。」
アーサーはそう言うと、ジェイクを連れて部屋を立ち去った。

「はぁ・・・」
ため息をつきながら、高級すぎる部屋を眺めた。

「これからいったい何をすればいいんだろう・・・」
そのささやきは誰にも聞こえなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8099a/

侍

2010年10月22日00時36分発行